

# 東邦大学学術リポジトリ



## OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	25th European Respiratory Society (ERS) International Congress 2015
作成者 (著者)	中村, 浩章
公開者	東邦大学医学会
発行日	2015.12
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 62(4). p.281 282.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2015.r003
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD30024414">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD30024414</a>

## 25th European Respiratory Society (ERS) International Congress 2015



中村 浩章

東邦大学医学部小児科学講座 (大橋)

2015年9月26～30日にオランダのアムステルダムで開催された第25回ヨーロッパ呼吸器学会(25th European Respiratory Society (ERS) International Congress 2015)に参加させて頂きました。今回は、私がアレルギーを専門として国内留学をさせて頂いた時の恩師である、東京慈恵会医科大学附属第三病院小児科の勝沼俊雄先生と国立病院機構相模原病院小児科の井上隆志先生と行動を共にさせて頂きました。

オランダのシンボルといえば“チューリップと風車”ですが、この季節にチューリップは咲いておらず、朝晩の冷え込みと雨が多いようです。しかし、私たちが滞在した期間は連日晴天に恵まれ、現地のオランダ人にも「とてもラッキーだ」と言われました。アムステルダムの町は、アムステルダム中央駅を“要”として扇状に広がり、その間を運河が何重にも走り抜けるまさに“水の都”といった様相でした。オランダの首都にしてはこぢんまりとした印象でしたが、美術館や博物館が点在しており、“芸術の都”という一面も垣間見ることができました。町を縦横に走るトラム(日本でいう路面電車)は、アムステルダムの名物であり、現地の人から観光客まで主な移動手段として利用していました。トラムを中心として、並走するように車道、またその外側に自転車専用の道路がありましたが、猛スピードで駆けていく自転車は遠慮がなく、何度となく接触しそうになりました。

学会はというと、ヨーロッパ最大級の呼吸器学会であり、当然ヨーロッパ各国からの参加者が大多数でしたが、アジアや北米からの参加者の姿も見られました。成人領域における結核や慢性閉塞性肺疾患(chronic obstructive pulmonary disease: COPD)に関する演題が中心であり、小児領域の演題は数少ない印象が否めませんでした。その中で、



“風車の村”と呼ばれるオランダの観光スポット Zaanse Schans にて



ポスター会場にて、筆者(左)勝沼先生(右)

私は「Up-regulation of serum periostin and squamous cell carcinoma antigen levels in respiratory syncytial virus bronchitis of infants」という演題を発表させて頂きました。アレルギーの分野において periostin は、2006年に佐賀大学の高山 剛先生、出原賢治先生らによって報告され、IL-4 および IL-13 誘導遺伝子として気管支喘息の病態との関連において高い注目を集めている分子です。また、乳幼児期の respiratory syncytial (RS) ウイルス下気道感染症は、気管支喘息発作様の病態を呈し、その後の気管支喘息発症に関連すると考えられています。今回は、RS ウイルス下気道感染時の periostin の動態について検討し報告をさせて頂きました。発表はポスター形式でしたが、想定していた発表方法とは異なり“血の気が引く”思いをしました。まず最初の1時間は、座長の進行のもと、ポスター前で各演者がプレゼンテーション、そしてディスカッションを行う

従来通りの形式でしたが、その後の1時間は、各演者が壇上でのオーラルプレゼンテーションを要求されました。私の拙いプレゼンテーションを、座長は微笑ましく見守って下さいましたが、勉強不足を見事に露呈する形になってしまいました。

しかし、各国演者の発表と活発な議論に刺激を受け、とても有意義な時間を過ごすことができました。今回の経験が、私にとって大きなモチベーションとなったことは言うまでもありません。日常診療はもちろんのこと、臨床研究、学会発表、論文作成等々日々努力していきたいと思えます。

最後に、学会参加の機会を与えて頂いた当科の関根教授と医局員の皆様、日頃よりアレルギーの診療についてご指導をして頂き、今回の学会でもご同行させて頂いた東京慈恵会医科大学附属第三病院小児科の勝沼先生に心より感謝申し上げます。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2015.r003